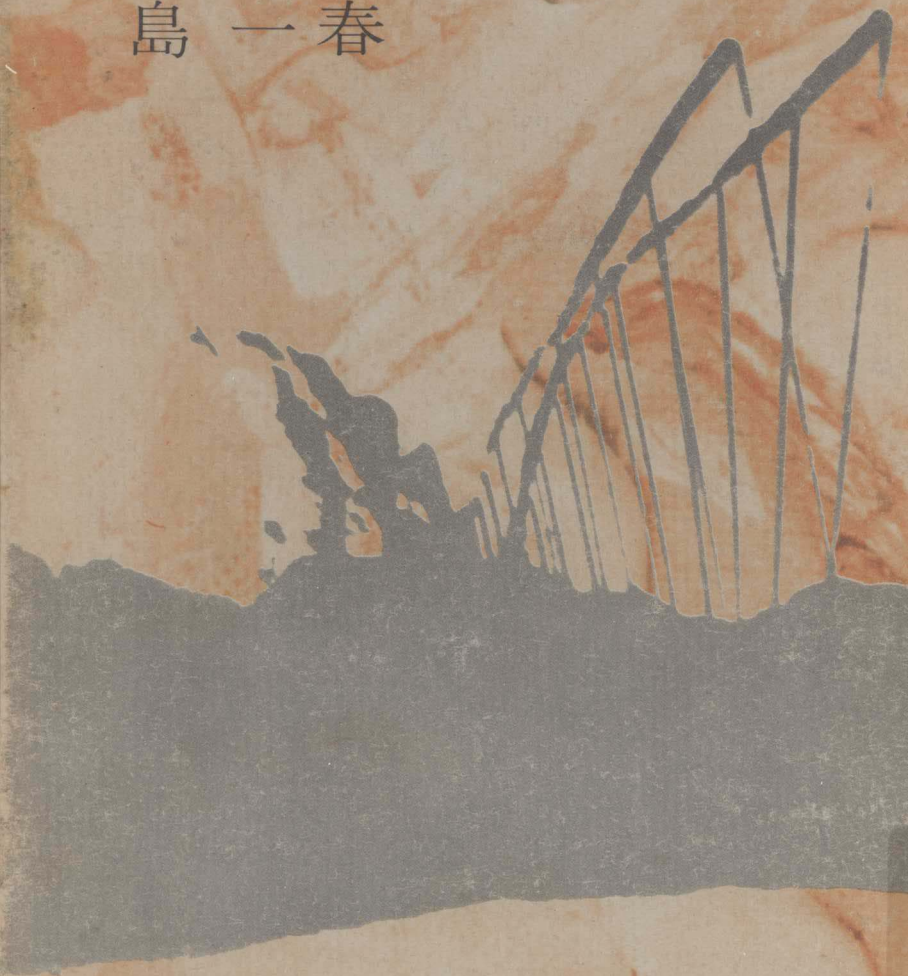


煤之燃

春一島



燃
之
燄

島
一
春



南北社

著者紹介

島 一春（しまかずはる）
昭和5年5月熊本県天草郡龍ヶ岳
町に生まれる。
昭和34年「無常米」で第3回農民
文学賞受賞。著書は「無常米」（南
北社）「孤島」など。
東京都荒川区西日暮里4-24-2

燃える蝶

島 一春著

定価 四八〇円

昭和四十二年六月十五日発行

発行者 大竹 延

発行所 南北社

東京都千代田区神田須田町一ノ二六
電話（東京）二五六 三三五（大代表）

振替東京五〇六三九

印刷 芳山印刷（株）

製本 弘文堂

燃える蝶

第一章 笹の櫓

5

第二章 風の港

99

第三章 地鳴りの昼

153

第四章 のさりの冬

239

あとがき

342

題字 篠崎 千
裝幀 山本美智代

燃
え
る
蝶

第一章 笹の櫛

岡村えんは十三歳の夏、天草の村から紡績工場にむかう便船の上で、沖合いはるかの波間に明滅する不知火をみた。明治四十一年、陰暦八月一日の未明のことである。

風のない夜であった。星屑をのみこんだ雨もよいの漆黒の天の重いしずもりの下で、海は暗く沈黙していた。ぎいぎい々と鳴る二丁の艀脚の軋み、舷側を洗うなめらかな水の音、青白く碎けて尾を曳く夜光虫が、海の静寂をふかくしていた。

潮鳴りも息をひそめた暗い海の彼方に、突然、ろうそくの炎のような火が燃えたのは一時ごろだったろうか。黒々と溶け合い重なり合う海と空間から忽然と湧き出た一点の火は、おのれ自身の出現に狼狽したふうに不安定にゆれていたが、進るように左右に飛び散り、細長い光の帯をつくった。その光の帯はいつとき軽やかにたゆとうてから、一瞬にして消えた。だが消えたかと思うと、また一点の火がふつと現われる。そしてふたたび飛び散り、揺れ、ふれあい、燃えながら走り、音もなく滅びていくのだった。

その華麗で静肅な炎の乱舞を、えんは屋根板の隙間から呼吸をつめて凝視していた。

「おお、龍燈が燃えよるぞ。みんな、早よう起きてきて拝みもうせ」

艀束から右手を離れた船頭の茂八は、不知火を片手拝みしながら胴の間の娘たちに声をかけ

た。しかし屋根板の下から返事はなく、かすかな鼾が流れてきた。退屈な艀船の旅に疲れ飽いた娘たちは、せまい胴の間に躰をよせ合つて横たわり、深い眠りをむさぼっていた。目醒めていたのはえん一人だった。

不知火海の不知火は一年に一回、陰曆八朔^{はつき}の日の未明に、遠い海面に燃える。不知火海に臨む天草のえんの村では、その夜は近所隣の者が手料理を持ち寄つて座をつくり、龍燈待ち^りをする。海と山の神々が宝と幸をまく瑞祥だと言い伝えられる龍燈——不知火を拝むためである。

しかし龍燈は、ふしぎに人間の心の間隙をねらうようにして姿を現わし、消えていく。交替で沖合いを監視している時には現われず、待ち疲れた人たちが家の中で話しこみ、とろとろ眠ったりしてふと気づいた時には、すでに炎の宴は終っているのであった。えんは三回もこの龍燈待ちの座に加わったことがあるが、ついに一度も龍燈を拝む機会にめぐり遇うことができなかった。

待つ気などは毛頭もなく、眠れぬままにふと眺めた海面に、はからずもえんは生れて初めての不知火の乱舞を目撃したのである。

九州本土の松橋町に米や雜貨を仕入れにいく茂八の船が、雨龍崎^{うりゅうざき}村鬼浦の港を発ったのは朝の七時であった。募集人のお民に引率された九人の娘たちは、一人五錢の契約でその船に便乗した。いずれも十五、六歳で、はじめて親もとを離れ、天草を離れて出稼ぎにいく娘たちである。

波止場には親兄弟や部落の人たちが見送りに来ており、彼女たちは頬を紅く上気させてしきりに囁ずりあい、売られていく仔牛のように昂奮していた。だが漕ぎ出された船が小松ノ岬をまわり見送りの人群れや村の景色が視野から消えると、突然声をあげて泣きはじめた。

それは肉親や生れ故郷と今生の別れを惜しむかのように、船べりを手で叩き、身悶えして、声も哽れるばかりの泣きぶりであった。声をはりあげて絶叫するように泣く娘もいれば、くいしばった歯の間から笛のような鳴咽をもらす娘もあり、舁を絞りあげるように呻いてはしゃくりあげる娘もいた。個性ゆたかなその泣き声は混声の大合唱となって岬の山麓にこだまし、朝あけの海づらに響きわたった。

「こりや、まっで、人買い船の船頭になったごたる。こげに切なか声で泣かるっと、おれまで胸のふさがる気のするぞ。一人五錢じゃ割にあわん商売たい」

茂八は酸っぱい表情になって視線をそらし、潮焼けした頬に渋い苦笑をはわせた。脇臈を漕いでいる若者の俵太郎も心をゆさぶられるふうで、臈脚がしきりに乱れた。

九人のなかで最年少者であるえんは、声を出さずに泣いていた。えんにとって、村の段々畑や小川や浜辺の砂にしみついている想い出は、飢えと涙の想いばかりであった。家族揃ってくらししたこともなく、母にあまえた記憶もない。何一つとしてえんの心をひきとめるやさしさのない故郷であったが、しかしそれゆえにえんの心は重くうずいた。見慣れた八郎岳の稜線が岬の山影に遮られて消えると、えんは胸がしめつけられるようで膝が震えた。下腹部の鈍痛が始ったのは

その時からである。

ごちごちと漕ぐ船に揺られて、それから十七時間余が経過している。油風ぎの青い海、緑の島々のたたずまい、長閑な流しの釣り船、夏雲——平穏で、うらうらしていて、気の遠くなるような和やいだ風景である。燦めく太陽と海と微風のなかを艀船に揺られているうちに、娘たちはしだいに元氣をとりもどしてきた。泣き腫らした目で茂八の剽軽なハチゲン（自慢）話にふき出したりしていたが、めいめいが風呂敷包みをほどいて早めの昼餉をとるころには、もう茶目っ氣旺んな娘にかえっていた。

「畑中でめし食うと、野の匂いのして旨かばって、船の上で食うと磯の匂いのして、めしの味がしっかりよかね」

「ほんなこっ、海がぜんぶわが物になったごたる氣のして、よか氣分たい」

潮の香が彼女たちの食欲をかきたてるふうで、大きい握りめしが咽喉を鳴らしながら、鮮かな速度で通過していくのである。

「みんな氣張^ばって泣いたけん、さっぱりして腹もへったろうたい。めしも旨かろう」

お民が皮肉たっぷりの口調で言う、一人がべろりと舌を出し、途端に茶碗の割れるような笑いがはじけた。

「千代があんまり切なげに泣くもんじゃけん、おれまで妙に悲しゅうなったとだもん」

「ほんなこっ。だれでもワアワア泣くとに、おれだけ泣かんでおると、人に悪かごたる氣のした

もんね」

「あらあら、しょっぱなにジゴ（尻）声はりあげて泣かした人は、だれだったかい」

と、けろりとした顔でたわいない軽口の応酬が、しばらくの間にぎやかにはずんだ。船が岬をまわった時の悲壮な緊張感、湿った別離の感傷や昂ぶりはうそのように消え、消えたあとのからつとした爽快な空気が流れた。

やがて、村にいたころはどこそこの家の梨や柿を盗んでたべたとか、村祭りのとき道で拾った二銭銅貨を人にかくして飴を買ったとか、在村中の小さな犯罪の告白話が始まった。夜這いに忍んできた青年を追い返した話では、手ぶり身ぶりがはいった。汗の光る口もとをとがらせ、唾の泡をとばせて語り合う彼女たちは、村うちでの過去の秘密を吐き出すことで、島を離れるという解放の実感にひたっているようだった。

それにも飽きると、子守唄や民謡の合唱がはじまった。あけっぴろげな、何の屈託もない若い歌声は、海づらをわたり、明かるくきらめく夏空に吸いこまれていく。

「やれやれ、おなご心と秋の空とはよう言うたもんたい。ばって、泣き合戦よりも歌のほうがよかぞ」と茂八は笑い、娘たちに声を和して潮唖れ声をはりあげて歌った。

夕闇が島山をつつむころ、俵太郎が胴の間に屋根板をはった。その下にすべりこんだ娘たちは席のばい、合いでひと騒ぎしたが、やがてこげ臭い体臭をよどませ、健康な寝息をたてはじめたのであった。

「神様のわざごととは言いながら、広か海に燃えたり消えたり、ふしぎなもんじゃね」

茂八は臆を漕ぎながら独りごとに呟いた。

暗い海をいろどって華やかに揺れる炎に、神の火という厳肅な神秘さよりも、えんはふかい孤独を感じた。低く高く明滅する炎の点と帯は、無音の音楽をもっており、えんの心をつきあげてくるその音楽は、冷えびえと侘しかった。燃えては消え、滅びては燃えたつ光は、人間の哀歓にかかわりなくそこにありながら、生れては死んでいく人間の無数のいのちの相をまざまざと描き出し、繰返し演じているようであった。

えんは、不意に、くらりとした眩暈に襲われた。

暫くして、えんが俯伏していた顔をあげた時、炎の饗宴は終っていた。あの華麗な炎の儀式は束の間に垣間見た幻影だったのか……えんは暗闇の彼方に目を凝らした。遠い沖合いに、残火のような炎がぱつと燃えて消えるのが見えたが、海はそれっきりもとの暗さにもどった。そして、海が重い静寂にたちかえった時、えんは女の初潮をみた。

二

船は予定どおり翌日の午まえに、松橋町の港についた。港から駅まで半里ほどの道を、信玄袋を肩に、そろそろ連れなつて歩きながら、娘たちは機嫌のよい朝の雀のようにしゃべり合った。

充ちたりた眠りのあとの紅い頬をつやつや輝かせ、馬車が通っても人力俵とすれ違っても、さざめき笑うのである。

駅のプラットホームでも、笹の葉がふれ合つて鳴るような笑い声がたえまなくゆれた。しかし驀進してきた汽車がレールを軋ませて停車すると笑いは消え、彼女たちは蒼ざめた顔をこわばらせて棒立ちになった。

「なんだから、怖しか！」

「これが、汽車ちうもんな！」

えんもそうだったが、彼女たちが汽車をまのあたりに見たのは、この時がはじめてだったのだ。早よう乗れ、というお民のうわずった声が耳朶をうったが、彼女たちはおろおろするだけである。

えんの足も竦んだように動かなかった。

島では十里の道に行くにも、はき替えの草履を用意して歩いていく。人力俵も馬車もない村では火急の病人でさえ若い衆が戸板で担いでいくし、道のないところは艀船で漕いでいくのだ。

肥後の町方まちかたには汽車という便利な乗物があると聴き、えんは密かに期待してきた。けれども、いま白い蒸気を噴きあげ、ごうごうとレールを鳴らし、黒い猛牛のように突進してきた汽関車の傲慢な猛々しさはどうであろう。天草の囲炉裏辺で人の話にきいた、ハイカラで乗り心地のよいという汽車ポッポとはまるでちがうではないか。冷たくて、強引で、鋼鉄の匂いのする怪物では

ないか。人間のまごころや願ひごとなど恐らく齒牙にもかけぬであろうこの黒い怪物は、有無をいわず人間を拉致し、想像もおよばぬ世界へつれ去っていくのではないか。そういう恐怖の予感がえんを貫き、しめつけ、手足の筋肉を硬直させたのであった。

プラットホームまで見送りにきた茂八は、

「さあ乗れ乗れ、早よう乗れ。ぼって、他郷よその男を乗せてサ、割わつたやつは、帰かえつてきても天草には上陸させんぞ。ええな、ええな」

と、打ちこまれた杭のようにつき立っている娘たちの臀を、平手でびしゃびしゃ叩いてまわった。

娘たちはお民と茂八に押しこまれるようにして汽車に乗った。屋根の上に抛りあげられた仔猫のような表情だった。汽車が動き出し、茂八が手をふると娘たちは咽びあげた。

福岡県大牟田市のK紡績工場には、四百人余りの女工が働いていた。天草の雨龍崎村からきた四人の先輩女工が、えんたちを駅まで迎えにきてくれた。

工場の黒い鉄の門をはいるとき、えんは躰がひきしまる思いだった。周囲を鉄条網の柵でめぐらした中に灰色の工場の屋根が並び二階建の寄宿舎は工場と少しはなれた一隅にあった。寄宿舎の二階の窓から眺めると、柵の外側には川が流れており、川下の港には船の帆柱が幾百と並び立ち、その先端はけぶって見えた。工場の機械の音が海鳴りのようにきこえてくる。日本はロシア

と戦争して勝ったが不景気だ、と天草では言っていたが、町には活気があるものだといんは思った。

翌日、身体検査があった。大柄なえんはほかの娘たちに劣らぬ躰をしていたが、年を訊かれはせぬかと、それが心配だった。会社の採用年齢は十六歳以上であり、えんは三つも年が若かったのだ。工場医の形式的な診察がすむと、労務係が一人ずつ呼びつけて家族のことなどを訊いた。年を訊かれたとき、えんはお民に教えられたように、十六でござす、と答えた。

「十六歳か。よし、しっかり働け」

と若い労務係は奇妙な笑いを唇にはわせた。会社の定めた賃金で、会社の定めた労働に耐える体力の持主でありさえすれば、労務係にとって年齢は問題ではなかったのだが、家を出る時からの不安であった難関を通りぬけたと思い、えんは胸を撫でおろす心持だった。

紡績は金とれる、稼いだ金を家に送って親を喜ばせることができる、とえんは空想を脹らませていた。他所行きの着物をつくりたい、うまい物を食いたいという欲望を抱いた娘もいただろう。だが、娘たちは作業現場に出たその日から悲鳴をあげねばならなかった。

見習女工の労働時間は、朝七時から午後の六時までだった。朝、六時には部屋ごとに設置してあるベルが、寄宿舎いっばいに鳴りひびく。とび起きて洗面、部屋の掃除、作業衣に着替え、食堂に駆けつける。水っぽい味噌汁とふたきれの漬物で、米と麦の等分にまざっためしを食う。めしをかみかみ食堂を出ると、男の見廻りが待ちうけていて、工場へ引率していくのだった。用便